坂本城を考える会ニュース

坂本城を考える会発行
発行責任者
天田 省三
大津市下阪本5丁目10-6

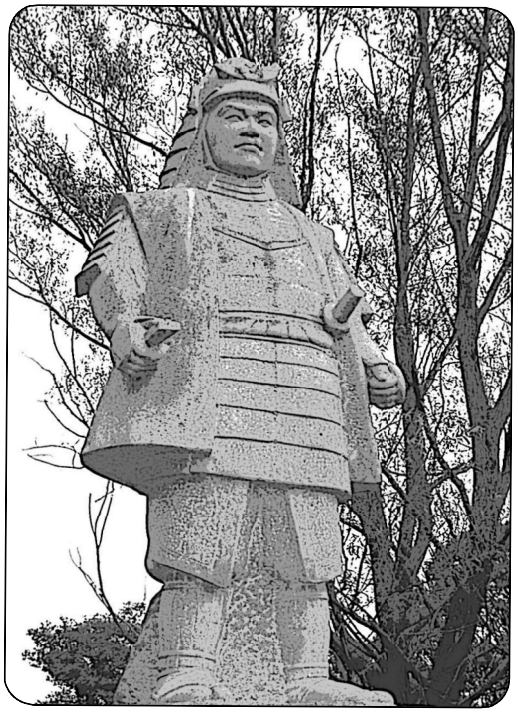
2月15日・大津市民会館
NHKのぞ自慢大会へ

会の発展のため勇気を奮って
天田省三会長おおいに語る

去る十二月九日、私たち坂本城を考える会の役員10名ばかり初めて忘年会を開きました。皆、同じ志を持っている仲間ですので、好きな事を言い合い和気あいあい誠に楽しい酒席となりました。

席上、役員から「来年に大津市民会館で行われるNHKのど自慢大会に誰か出場しよう」という提案がありました。「光秀（おとこ）の意地」を唄う鳥羽一郎氏がゲスト出演するからには、「会長の天田さんの出番です」と持ち上げられ、断る理由を見つけられずOKしてしまいました。私は今日までカラオケが苦手だったのでそんな場に出た事は一度も無かったのでしたが、今度は勇気を奮って出場しようと決意しました。

「光秀（おとこ）の意地」の作詞者・祝部禧丸氏は地元坂本の人で今日まで歴史物の作詞を何曲か作られており、現在では色々な顔を持つユニークな人でもあります。勿論私たちの会員でもあり今日まで色々協力して頂いております。何より私たち「坂本城を考える会」が発足して間もない頃、



明智光秀・琵琶湖畔で何想う

光秀（おとこ）の意地を歌い上げる

「光秀（おとこ）の意地」を作詞され琵琶湖ホテルで歌手鳥羽一郎氏の新曲発表会までされました。招待者を代表して現大津市長目片信氏から熱烈な歓迎の挨拶があり、私も出席しまして共々にお祝いを申しました。

のど自慢大会に鳥羽一郎氏がゲスト審査員として来滋されます事に何とも不思議なご縁を感じます。「光秀（おとこ）の意地」は今後私たちの運動には大きな宣伝手段と考えて、引き続き歌って行こうと思っています。

仁君領主 明智光秀公と大津市立日吉中学校
大津市 日花基次

JR比叡山坂本駅で下車し、出札口の階段下の廊下に「忘己利他」二百五十四世の天台座主梅山猊下の額と「世界文化遺産へ登録」祝の横断幕があり、出ると前が坂本石積みの郷公園である。帝王学や王道を忘れた暴君狂法師信長は比叡の焼打ちと無差別徹底的殺人の厳命をこの地点から下した。配下の光秀・秀吉の忠告も聞かず、後世に禍根を残したのである。

光秀は焼打ち後抜擢され坂本城主に就き仁政を行い、治水用水灌漑の利水工事、山門復活の監視を名目に焼かれた社寺へ陣地補強と称して城の用材を廻し、地域慣習の「敬神崇祖」の精神を培養した。又伝統技術の穴太衆石積みを保護し諸公の城普請の参加を奨励し喜ばれた。農作物は実栽培面積のみ課税して畦畔・水路は免除した。中でも焼打ち後の山野の復興は家臣・領民の一体になっての共同作業であった。「波間より重

ねおけるや峰の雲磯山伝いに茂る杉村」坂本城での茶会を終えた堺の茶人が安土城へ向かう船中での作を見てもうなづける。

切磋琢磨

公園より直線距離50米の東南に日吉中学校創立62年が建つ。その間卒業生は各卒業年度毎に強固な学年同窓会を結成すると共にふさわしい名称を公募し決定し、更に全員同窓会「高嶺」へ入会登録する。共通目標は地域の活力振興に貢献することと後輩生徒会を激励し愛校心を発揮することで、具体的には、各卒業年度毎に校訓どおり「切磋琢磨」し合い事業を興し推進していくのである。たとえば、8回卒「二九（福）友会」は学校シンボルに花は朝顔（暑さに負けない、実は薬草として生徒会資金）木は杉（光秀公の植林が前校舎の建築材）鳥は時鳥（ほととぎす、焼打ち当朝攻撃軍船を急報するため乱打し生源寺の釣り鐘が破れたのを血の叫びに模擬った）と、当時生徒会長杉村邦彦君提案（彼は後に5代目高嶺会長に就任し益々発展に寄与し現在も国立大学院教授として「絶望の中の楽観」顔真卿の学説「弘裕の精神」を説いている）により定め、また15回卒「三十六（認む）会」は前記坂本石積みの郷公園の設計に鐘楼建立を採り入れ、多くの高嶺会員が自発的に参加し日吉山王みこし駕篭丁姿で生源寺から担ぎ入れて、除夜の鐘を鳴らした。40回卒「つくしんぼ会」は会長三日月大造君提案で駅のプラットホームから見えるよう校舎屋上の壁に「We Love 日吉」横断幕（現存）を掲げて、愛校心を顕現した。55回卒「平！みんな元気（亀）会」時に学校象徴の破れ鐘が楼内に納まり高嶺会員は喜んだ。現在も学校のプランタ26個に花を植え、光秀公の仁徳を偲び駅周辺を美化している。

日吉中学校校訓の「切磋琢磨」の石碑

役員として活躍

日吉学区では明智光秀公顕彰会が天台真盛宗総本山西教寺を基盤に全国組織で結成され、呼応して本会（坂本城を考える会）が3回卒「みそら会」会員の天田省三氏（光秀公の重臣の子孫）を中心に、高嶺会現会長藤本一也君や十回卒「十和会」会員河村益孝君等等が活躍されている。その中に日吉中学校長退職後坂本児童委員を務められる本田彰先生が本部役員として頑張っておられる事には感謝している。

弘仁14（823）年嵯峨天皇の勅命により初代の天台宗戒壇院別当になった大伴国道の在世以来坂本に居住し栄枯盛衰・存亡興廃の郷土史の中で明智光秀公から受けた恩恵「使節公人」と明智家の遺品の中で育った私は大正12（1923）年生まれです。日吉中学校には22年間勤務させていただきました。

なお、駅前の坂本石積みの郷公園にある伝統教育大師（伝教大師）像と光秀公にも深い関係があり、いつか紹介したいと思います。

駅前の公園にある像と釣鐘

明智光秀公に対する一考察

大津市　並木益雄

明智光秀の名を始めて知ったのは何時頃であろうか。小学校五年生になって、新しく増えた科目の一つに国史があった。所謂、日本の歴史である。日本の国の成り立ちが遠く神代の時代から始まるのである。奈良時代、平安時代を経て、やがて武士の世となり室町時代の1467年には応仁の乱が起こりそれを契機として、日本の国中を巻き込んだおよそ百年に及ぶ戦国時代が到来したのである。全国が麻の糸の如く乱れたその中で、やがて頭角を現したのが今川義元を桶狭間で討った尾張の織田信長であった。

やがて信長は全国統一の野望を抱き、次々と近隣の諸国に攻め入ったのである。

織田信長の全国統一

その頃になって数ある織田家の譜代の家臣を差し置いて目覚ましい働きをして功を立てたのが木下藤吉郎と明智光秀であった。二人はその働きを主君信長に認められ次第に重く取り立てられ、遂に藤吉郎は長浜の地を拝領して城持ち大名となり羽柴秀吉と名を改めやがて筑前守を賜ったのであった。他方、光秀は近江国滋賀郡と丹波一国の領主とまでなったのである。更に光秀は天正3年（1575年）の叙任の際、姓の「惟任（これとう）」と官職の両方を賜り、従五位下惟任日向守となった。この事は他の家臣の大方が官職だけであった事を思うといかに信長の信任が厚かったかを窺えるのである。

しかしながらこの様な状態はそう長くは続かず、次第に二人の立場が明・暗に岐れてきたのである。秀吉は相変わらず信長の信任も厚く今まで通りに否それ以上に活躍の場を与えられて信長の覚えも良かったが、他方光秀はどうした事か次第に信長に疎んじられ数々の堪え難い仕打ちをされる様になったのである。遂には多年培ってきて軌道に乗ってきた領地の滋賀郡と丹波一国を信長に召し上げられ、代わりに未だ敵国の毛利の領土である出雲、岩見の二国を「己の手で攻め取れ」とまで言われたのである。

本能寺の変へ

遂に進退窮まった光秀は天正十年（1582年）六月二日早朝、秀吉の毛利討伐の支援を命じられて丹波亀山城から出陣する途上、急に道を変え桂川を渡って本能寺に宿泊している信長を急襲して首を討ち取ったのである。これが世に言う「本能寺の変」である。

一時は天下を取ったかに見えた光秀であったが、11日後の6月13日、毛利から急遽軍を返した秀吉軍と天王山の麓、山崎で戦い武運拙く一敗地にまみれて敢えなく露と消えたのであった。所謂「明智の三日天下」である。

さてここまで辿り着いたとき、ある一つの疑問が生まれたのである。秀吉と光秀は同じ様な働きをしながら何故明と暗に岐れたのであろうか、なぜ光秀独りが信長の勘気に触れ堪え難き仕打ちの数々を受け、追い詰められたのかと言うことである。いろいろと思い巡らして見るとき心に浮かんだ事がある。

秀吉の生い立ち

秀吉は尾張中村在の百姓の生まれで日吉丸と言ったが幼くして生家を飛び出し、野武士の蜂須賀小六に拾われていた時期もあったが、織田家の足軽となり主君信長の草履取りから身を起こしたが、持ち前の明るさと才智に富み主君大事と仕えた。その誠実さが信長に認められたのである。秀吉はどの様なときでも「お館様！」と言って信長の懐に飛び込んでいったのである。あたかも幼子が泣きながら母親の胸元にしがみつく様に良い時も悪い時も信長の胸へ飛び込んで行って信長の心を揺さぶったのである。

光秀の生い立ち

他方光秀は美濃国明智庄の城主を父に持ち清和源氏の美濃の守護職、土岐氏の支族でもあった。そうした名門の生まれに加え諸学に通じ和歌、茶の湯にも通じる当時の戦国武将には珍しい文化人であった。その教養の深さが、やがて粗暴で天を恐れぬ主君信長を見る眼を変えていったのではあるまいかと思うのである。天下布武の名の元に勝つためには手段を選ばず、果ては比叡山の焼打ちや朝廷を朝廷とも思わぬ信長の狂気じみた行為に、何時しか光秀は秀吉の様に何が何でも我武者らに付いて行けなくなったのではあるまいか、信長を見る眼が変わったのである。今までと違う或る種の覚めた眼で信長を見ていたのである。

光秀の心の内とは

そんな光秀の心変わりを以心伝心、敏感な信長が見逃す筈がなく腹立ちの余り光秀に対して、あの様な狂気じみた行為を重ねて行ったのではなかろうかと思うのである。畢竟、光秀の心の内を読んだ信長の行為であったのだと自分なりに結論付けて此の稿を終わることにする。

光秀を讃ふ盆唄月走る
　　益雄
（師走の比叡山麓にて）

山麓より比叡を仰ぐ

新年の抱負

会長　天田　省三

私達坂本城を考える会も三年目を迎えまして、新たな気持ちでこの一年を精一杯頑張りたいと願っております。

昨年は十一月に地元の日吉中学校生徒に坂本城の歴史に出前講座に出かけました。

また地元下阪元学区の文化祭にも初めて出展する事が出来まして大きな反響を呼びました。

私達の活動が着実に地元に密着した運動となりました。

新年は更に地元の学区民に広く認知される運動となる事を願っております。

出来得れば私達の運動に行政が手を貸してくれるようになれば、大きな前進となる筈です。

坂本城を考える会が更に大きな力となる事を夢見つつ、今年も頑張りましょう。

今年に入り最初の嬉しいニュースの一つとして思い掛けないチャンスが生まれました。二月十五日大津市民会館でNHKのぞ自慢大会に出場する事となりました。

ゲストの鳥羽一郎が昨年夏「光秀（おとこ）の意地」を発表していますので、この歌を私が代表して唄います。

又とない宣伝の機会として全国に発信したいと思っております。

勇気を奮って…、ご声援ください。

光秀（おとこ）の意地　鳥羽一郎

（セリフ）

これが光秀の本音にござります

一寸の虫にも五分の魂

やらねばやられる　戦国の掟

わしは主を間違えたようじゃ

坂本城雑感

東京都　斎藤　秀夫

ポルトガルの宣教師ルイス・フロイスは、その著書「日本史」の中で、こう記している。「琵琶湖のほとりにある坂本と呼ばれた地に邸宅と城砦を築いたが、それは日本人にとって豪壮華麗なもので、信長が安土山に建てたものにつぎ、この明智の城ほど有名なものは天下にはないほどであった。

確かにかつて琵琶湖のほとりには、大天守と小天守を備えた、堂々たる坂本城が存在していた。しかし、その豪壮な水城も、天正十年六月、本能寺に信長を襲撃した光秀が、その後に起きた山崎の戦で秀吉に敗れ、堀秀政に攻められて、廃墟と化した。私が訪れた際も、ただ城址に、標識がポツンと淋しげに立っているのみであった。そんな坂本城を復興させようという動きが今、地元の方々の間から起こりつつある。

昨年乗船した一番丸

かって光秀は、この坂本城に堺の商人津田宗及を招いて、茶会を催した後、御座舟に乗って琵琶湖の対岸にある、主君信長の住む、安土城に向かったという記録がある。

そのとき光秀はいったい、何を見ていたのであろうか？おそらく坂本城を復興しようとする地元の方々は、その時の光秀の気持ちを、少しでも分かりたいがために、再建運動を思い描いたに相違ない。夢かも知れない。しかし夢でもいいではないか。ルイス・フロイスが称賛した光秀の居城を、もう一度眺めたいと思うのは、何も地元の方々ばかりではあるまい。夢が実現することを祈りたい…。

編集後記

今号より新聞形式で編集しました。都合により記事が後先になりました。今後とも読みやすくしていきますので、ご意見や記事をお寄せください。（ふ）